

社交不安障害傾向者における注意操作の影響

—赤面不安を対象にして—

長谷川 芙美¹⁾

佐藤健二²⁾

The effect of attentional focus on social anxiety disorder
tendency person : For a blushing anxious

Fumi HASEGAWA¹⁾

Kenji SATO²⁾

Abstract

A self-focused attention (SFA) is pointed out as one of the factors that social anxiety is maintained.

The aim of the present study was to examine the effect of attentional focus on social anxiety in a group of high and low blushing-anxious participants. 368 university students were screened. A high blushing-anxious and a low blushing-anxious have been extracted for the blush fear score based on mean value $\pm 0.5SD$. Final analysis objects were 16 high blushing-anxious people, and 19 low blushing-anxious people. Participants were randomly allocated to either SFA condition or a task focused attention (TFA) condition. They were asked to engage in a 5 min conversation with a university student, and were instructed to either self-focus (SFA condition) or task-focus (TFA condition). Level of state social anxiety, self-awareness and negative automatic thought were measured.

SFA increased state social anxiety and a negative automatic thought, and a clear result that TFA was effective in the decrease of state social anxiety and a negative automatic thought was not able to be obtained in this study.

Key Words: social anxiety disorder, blushing-anxious
self-focused attention, task-focused attention, negative automatic thought

¹⁾ 愛媛大学医学部附属病院 Ehime University Hospital

²⁾ 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

問題と目的

程度の差はあるが、私達は初対面の人と話をするとといった場面で不安を感じることもある。社会不安(social anxiety)は「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」(Leary,1983)と定義され、日常の中で感じる不安とも言える。一般的に不安の程度が社会生活に支障をきたすほど高い場合、社交不安障害(Social Anxiety Disorder: SAD)とされる。

DSM-IV-TR の診断基準では、「よく知らない人たちの前で、他人の注目を浴びるかもしれない社会的状況、または行為をするという状況の一つ、またはそれ以上に対する顕著で持続的な恐怖。その人は自分が恥をかいしたり、恥ずかしい思いをしたりするような形で行動(または不安症状を呈したり)することを恐れる」と定義されている(APA,2002)。本邦では英語名を直訳した「社会不安障害」という名称で呼ばれていたが、2008年に日本精神神経学会において、より実態に近い表現の「社交不安障害」という名称に変更されている。

SADは1980年代半ばまで研究的関心もたれない障害であった(Stopa & Clark,1993)。その後、SADの慢性的疾患、高い罹患率、そして日常生活にきたす支障が改めて強調され(Liebowitz,Heimberg,Fresco,Traver, &Stein,2000)、注目されるようになった。症状は多くの社会的場面とパフォー

ーマンス場面に関連しており、フォーマルな対人場面に参加する、スピーチをする、初対面の人と会う、デートに誘う、主張行動、目上あるいは権威のある人と話す、あるいは不賛成を言う、見られる場面で何かをする等が脅威場面として知られている(Holt, Heimberg, Hope, & Leibowitz, 1992)。

さて、SAD に対し、欧米で効果が実証されている心理療法は認知行動療法である。その基本となる SAD の代表的なモデルは二つあり、一つは Clark & Wells(1995)の認知モデルである。このモデルでは、社会不安を持つ個人が社会的状況に置かれると、社会的状況および自分自身(自分が社会的標的になっている)に関する信念(スキーマ)が活性化し始める。この信念によって、SAD 者は社会的状況を危険に感じ、認知・身体・行動的症状を経験することになる。そして、こうした不安症状は個人の注意の焦点を変化させ、周りの状況に注意を向けず、自分自身に対して過度に注意を向けてしまうようになる。すると周りからの情報を正確に受け取れず、ネガティブな信念が確信されてしまう。つまり、自己への偏った注意が SAD の維持要因の一つであると考えられている。

もう一つは Rapee & Heimberg (1997)の認知行動モデルで、SAD 者は他者に対する望ましいイメージを作ることを重要視し、他者を批判的であると考えているという仮説からスタートする。SAD 者は他者から見られる自分のイメージを自分の中に作り

上げている。このイメージは過去の記憶(同様の場面でどのように振舞ったか)と、内的手がかり(身体的反応等)、および外的手がかり(他者の表情等)の情報から作られている。SAD 者は他者の評価が重要であると信じ、社会的状況に入ると他者がどのような基準で自分を評価するのか予測する。そして、自己イメージと他者が自分に求めていると予測した基準とを比較し、他者の基準に達しているかどうか判断する。つまり、両者の不一致が大きいほど不安が高まり、否定的な評価を受けることを予測するというような、不安の悪循環が繰り返されると考えられている。Clark & Wells(1995)の認知モデルとの共通点は、SAD の維持要因の一つとして自己へ焦点付けられた注意 (self-focused attention: SFA)の重要性を論じている点である。

また、二つのモデルが示すように、SAD 者は社会的状況でたいてい身体的な不安反応(例えば、発汗、赤面)を経験するが、その中でも赤面は典型的なものである(APA,2002)。本邦でも対人恐怖と呼ばれてきた神経症の一つとして、赤面恐怖の存在が古くから指摘されている(近藤,1980;丸山・児玉・小島・深沢,1982;笠原,2005)。他者にも容易に観察される赤面は、二つのモデルが重要性を論じている SAF を高める要因の一つとなり、不安の悪循環を生んでしまう身体的症状であると言える。

そこで SFA を低減するための方法として Rapee & Heimberg(1997)は、

SAD 者の注意が自己から逸れる事が重要であると考え、特に課題へ焦点付けられた注意(task-focused attention : TFA)が増加すればよいと予測している。

Zou, Hudson, & Rapee(2007)では SFA と TFA の影響を調べるために、大学生を対象に、赤面高群と赤面低群をそれぞれ TFA 条件と SFA 条件に分け、5 分間の会話をを行った。その結果、赤面高群では SFA 条件に比べ、TFA 条件において会話中の社会不安(状態社会不安)が低いという結果が得られた。しかしこの研究の問題点として以下の三点が挙げられる。

まず、5 分間の会話という課題が赤面高群にとって不安が喚起される場面となっていたのか明らかでなく、操作チェックがされていない点である。そこで、不安の状態を時系列的に測定することが必要である。

二点目は、TFA 条件に対する操作が妥当であったかという検討が不十分な点である。Zou et al. (2007)の研究では、注意が自己に焦点付けられていたかについて、100 を自分自身について非常に意識した、0 を全く意識しなかったとして、Visual Analogue Scale (VAS)で評定を求めるのみで、TFA 条件において実験参加者の注意が課題(会話内容)に向かっていたのか直接的な検討はされていない。そこで、会話内容をどの程度覚えているか尋ねることにより、TFA 条件における注意操作の妥当性をより明らかにできる可能性がある。

三点目は、SFAは否定的認知を増加させる(Woody,1996)と考えられているが、Zou et al. (2007)では否定的認知について検討されていない。TFAを増加させる注意操作では、否定的認知を変容するといった、認知そのものへの介入は難しいと考えられる。しかし、課題(会話内容)に没頭することで余計な考えにとらわれなくなり、否定的な自動思考(意図せず浮かび上がっては消えていく思考)の頻度が低減する可能性はある。またSFAやTFAにより否定的な自動思考の頻度に影響が見られるのか検討した研究は見当たらない。

したがって本研究では、赤面の程度を測定する尺度において、臨床群同様の得点を示す大学生を赤面高群、赤面不安を感じない大学生を赤面低群とし、それぞれSFA条件とTFA条件に分け、注意操作の影響を検討する事を目的とする。

仮説

- ①赤面高群において、SFA条件に比べ、TFA条件の状態社会不安が低い。
- ②赤面高群・SFA条件において、会話前に比べ、会話中の否定的な自動思考の頻度が増加する。
- ③赤面高群・TFA条件において、会話前に比べ、会話中の否定的な自動思考の頻度が低減する。

方法

1. 実験参加者

大学生 368 名に対し、SIAS(Social Interaction Anxiety Scale ; Mattick & Clarke,1998)日本語版(金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野,2004) , 対人恐怖症状尺度の「赤面恐怖」を測定する3項目(毛利,2002), 不安と関連のある抑うつの影響を削除するために、SDS (Self-rating Depression Scale ; 福田・小林,1983)を用いてスクリーニングを実施した。

記入漏れや記入ミスのあった回答を除外し、大学生362名(男性178名, 女性183名, 平均20.35[標準偏差(*SD*) = 2.75] 歳 ; 有効回答率 98.37%) の回答を分析対象とした。

赤面恐怖得点に関して、平均値(3.43 [*SD*=2.56]) $\pm 0.5SD$ を基準として赤面高群(4.71 点以上), 赤面低群(2.15 点以下)を抽出した。この際、SDS 得点がうつ病圏に入る人は除いた。

最終的な分析対象は、赤面高群・SFA条件8名(男性1名, 女性7名), 赤面高群・TFA条件8名(男性1名, 女性7名), 赤面低群・SFA条件11名(男性2名, 女性9名), 赤面低群・TFA条件8名(男性3名, 女性5名)であった。

2. 実験課題

実験の説明を行い、同意を得た実験参加者に対し、自動思考を測定する質問紙に回答を求めた。その後SFA条件、TFA条件各々に教示を与え、「大学生活」について1名の学生(実験協

力者)と5分間会話することを求めた。そして質問紙へ回答を求め、ディブリーフィングを行い、実験は終了した。実験の流れは Fig.1 に示す。

3. 実験協力者

実験参加者と初対面であることが確認された臨床心理学を専攻する大学院生(女性5名,男性1名)であった。

先行研究(Zou et al.,2007)と同様に沈黙が3秒以上続く場合は簡単な質問(「学部はどこですか?」等)をするように訓練を行った。

4. 測定尺度

<操作チェック：状態不安>

前安静期後, 教示後, 会話中, 後安静期後の状態不安を測定するために自覚的障害単位 (Subjective Units of Disturbance: SUD) を用いて測定した。

SUD はその時点での不安・緊張感を測る指標であり, 100 を最高, 0 を全く不安・緊張感がないとして 0 から100 の範囲で10cmの直線上にスラッシュを入れることで評定を求めた。

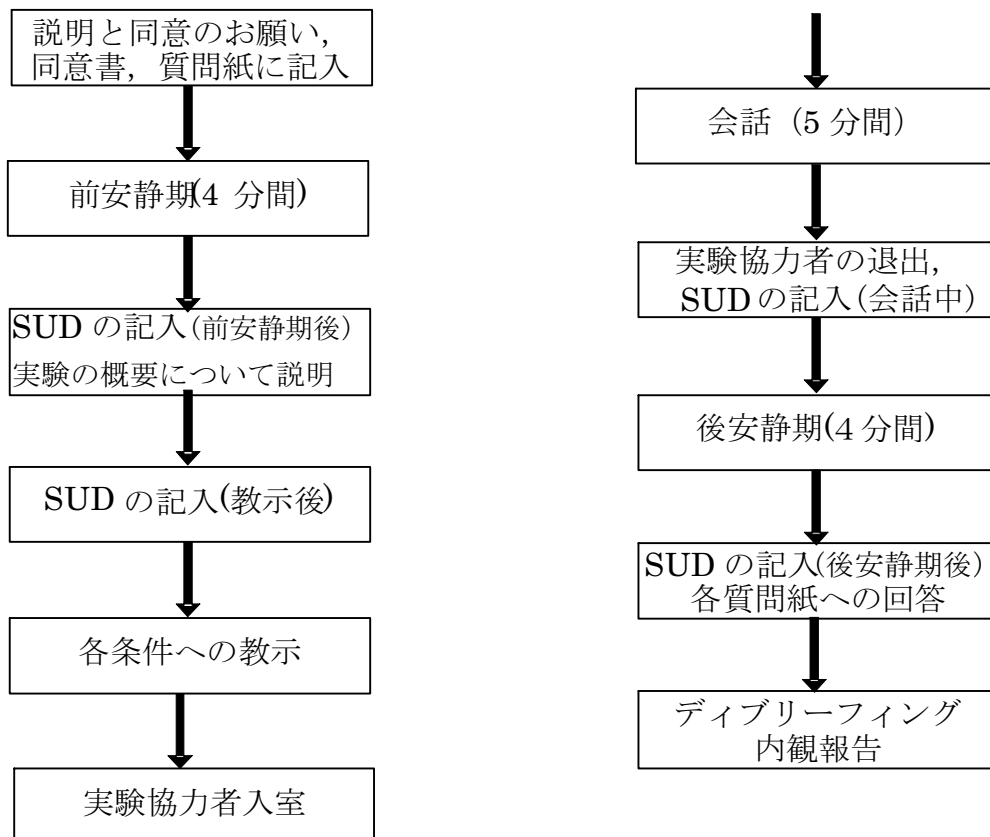


Fig.1 実験の流れ

<操作チェック：注意操作の妥当性>

TFA 条件への操作チェックとして、実験協力者が話していた内容で覚えている事について、自由記述で回答を求めた。

また、SFA 条件への操作チェックとして、自分を意識した程度について VAS を用い、0 を全く意識しなかったとして、0 から 100 の範囲で 10cm の直線上にスラッシュを入れることで評定を求めた。

<状態社会不安>

会話中に感じた不安や自分のイメージについて測定するために、「怒り、自尊心、恐れ、悲しみ、困惑、罪悪感、幸せ、恥かしさ、赤面」、「会話中の自分自身のイメージ」、「会話中に相手が自分について持ったと思うイメージ」について VAS を用い、100 を非常に感じた、0 を全く感じなかったとして、評定を求めた。

<自動思考の頻度>

自動思考の頻度を測定するために、Social Cognitions Questionnaire (Wells, Stopa, & Clark, 1993; Arimits, Furukawa & Cark, Unpublished.) を用いた。SCQ は「私

は赤面するだろう」、「人は私の事を嫌いだろう」等、自動思考を測定するための 23 項目の尺度であり、「1. 一度も思い浮かばなかった」～「5. 緊張した時はいつも思い浮かんだ」の 5 件法で回答する。会話前、会話中の自動思考を測定するために、それぞれ改訂を加え用いた。

結果

<実験参加者の特性>

実験参加者についての記述統計量を Table1 に示す。

まず、赤面高群と赤面低群において男性と女性の割合に有意差があるかどうかを調べるために χ^2 二乗検定を行なった。その結果、 $\chi^2(1, N=35) = 1.83, p=.18$ で男女の割合に有意な差はなかった。また年齢と SIAS 得点において、2(群)×2(条件)の 2 要因分散分析を行なった。年齢は、群($F(1,31) = 1.27, p=.27$)、条件 ($F(1,31)=.39, p=.39$)共に主効果は見られなかった。また交互作用も検出されなかった ($F(1,31)=.12, p=.73$)。SIAS 得点については、群で有意な差が見られ、低群に比べ、赤面高群の得点が高かった ($F(1,31)=19.67, p<.01$)。

Table1 各群・各条件における平均得点と標準偏差

変数	赤面高群		赤面低群	
	SFA条件(n=8)	TFA条件(n=8)	SFA条件(n=11)	TFA条件(n=8)
性別(男性:女性)	1:7	1:7	2:9	3:5
年齢	20.36(1.69)	19.96(0.80)	21.49(3.52)	20.55(1.05)
SIAS	47.13(18.57)	47.63(15.67)	24.36(13.13)	24.63(13.23)

Table2 変数間の相関

変数	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 恐れ	—							
2. 困惑	.67**	—						
3. 恥ずかしさ	.52**	.57**	—					
4. 赤面	.37*	.31	.68**	—				
5. Simage	.37*	.10	.30	.41*	—			
6. Oimage	.40*	.19	.41	.39*	.75**	—		
7. Self-aware	.17	.20	.06	.17	.00	-.08	—	
8. SeeOthers	-.25	-.26	-.51**	-.27	-.12	-.29	.23	—

* $p < .05$, ** $p < .01$

Note. : S image : 自己イメージ, O image : 相手が自分について持ったと思うイメージ, Self-aware : 自分を意識した程度, See Others : 相手の視点に立って自分自身を観察した程度

<データ整理>

データ整理を容易にするために、ピアソンの相関係数を用いて変数を結合してもよいかどうかを判断した。

Table2 に変数間の相関を示す。

変数の相関をもとに、先行研究と同様に(Bögels & Lamers,2002; Zou et al.,2007), 相関の高かった“恐れ”“困惑” ($r=.68, p<.01$)と“自己イメージ” “相手が自分に持ったと思うイメージ” ($r=.76, p<.01$)をそれぞれ結合し, 1つの変数とした。さらに独立変数の数を減らすために、恐れ/困惑、赤面、恥、自己イメージ/相手が自分に持ったと思うイメージの4つの得点を平均して“状態社会不安”の変数とした。この結合した変数は、社会不安の認知、感情、身体的表現を表すものである(Bögels & Lamers,2002)。

さらに変数が正確に結合されたか保証するため、因子分析を行った。その結果、固有値 1 以上(2.34)を基準と

すると、1 因子解が妥当であると判断された(因子寄与率 49.47%)。したがって、変数は正確に結合された。

また、操作チェックの“自分を意識した程度”と“相手の視点に立って自分自身を観察した程度”は、自己の気づきに関して基本的に同じ構成である(Bögels & Lamers,2002)と考えられているが、本研究では有意な相関は見られなかった($r=.23$)ため、別々に分析することとした。

<操作チェック：状態不安>

ベースラインを揃えるため、前安静後において一元配置の分散分析を行ったが、有意差は見られなかった。そこで、2(群)×2(条件)×4(時期)の 3 要因分散分析を行なった(Fig.2)。

その結果、時期×群で交互作用が有意であり($F(2.35, 72.97)=4.82, p<.01$)、単純主効果の検定を行なったところ、教示後において赤面低群に比べ、赤面

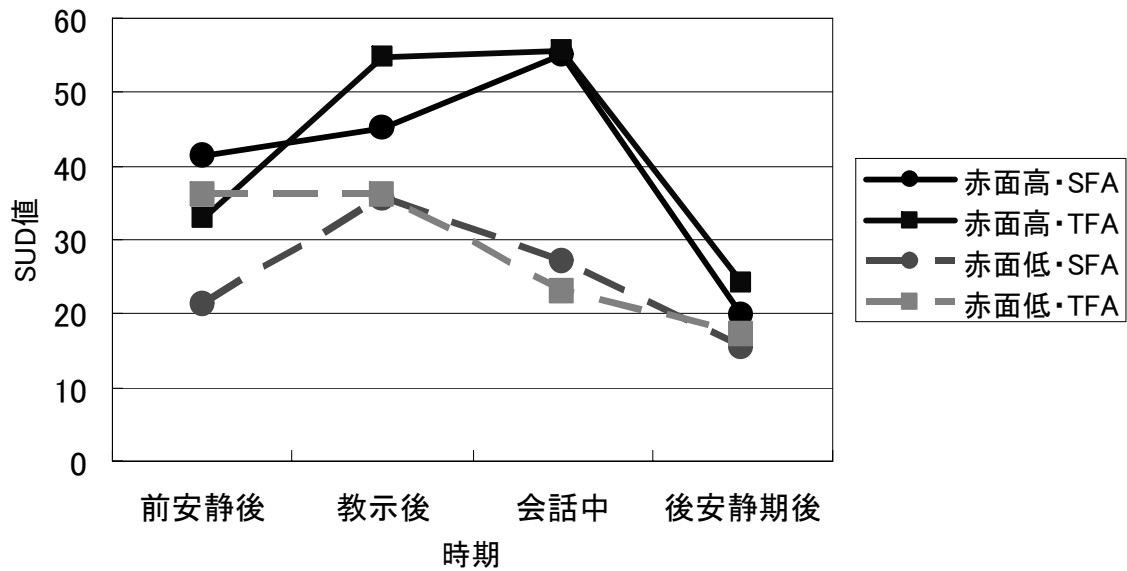


Fig.2 状態不安

高群の得点が有意に高い傾向があり ($F(1,31)=3.20, p<.1$), 会話中において赤面低群に比べ, 赤面高群の得点が有意に高かった ($F(1,31)=15.65, p<.001$).

また赤面高群において得点に差が見られ ($F(3,29)=16.80, p<.001$), 後安静期後に比べ, 前安静期後 ($p<.05$), 教示後 ($p<.001$), 会話中 ($p<.001$) の得点が有意に高かった. 赤面低群においても得点に差が見られ ($F(3,29)=4.86, p<.01$), 後安静期後に比べ, 教示後の

得点が有意に高かった ($p<.01$).

したがって, 本研究の実験場面は群に関係なく不安を喚起させ, 特に赤面低群に比べ赤面高群において会話中に不安が喚起された.

<操作チェック:注意操作の妥当性>

① 会話内容への注意(Fig.3)

実験参加者が記述した会話内容について分析を行なった. この際, ビデオ録画を拒否した実験参加者1名のデ

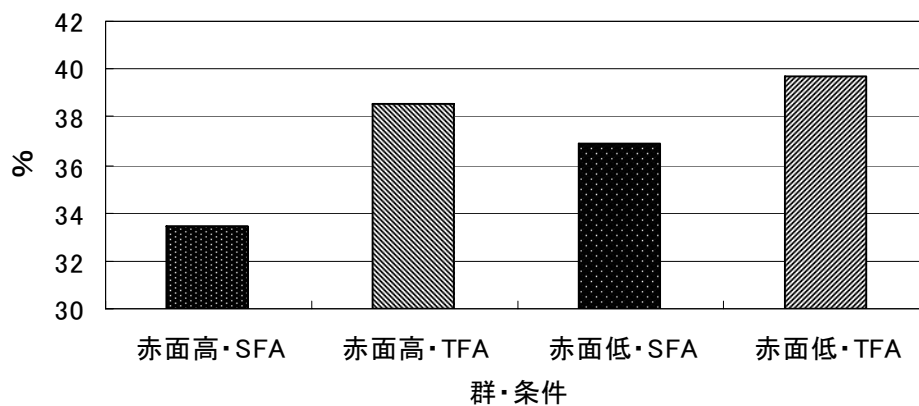


Fig.3 会話内容への注意

一タは除いた。

まず、録画したビデオから実験協力者が話した内容の逐語録を作成した。それを文章ごとに区切り、実験協力者が話した数とした。そして実験協力者とは別の評定者2名がビデオを見て、実験参加者が記述した内容について実験協力者が実際に話していたかについて評定をした。実際に話している場合は1、話していない場合は0として、得点化した。評定者間の一致率は95.23%であり、評定が一致しない項目は2名の平均点を用いた。その後、評定した得点を実際に実験協力者が話した数で割り、どのくらい内容を覚えていたかについて割合を算出した。

まず、群を要因とした Mann-Whitney の U 検定を行ったところ、有意差は見られなかった ($Z=-.82, p=.42$)。次に条件を要因とした Mann-Whitney の U 検定を行ったところ、有意差は見られなかった ($Z=-.81, p=.42$)。そして赤面高群・SFA 条件、赤面高群・TFA 条件、赤面低群・SFA 条件、赤面低群・TFA 条件について Kruskal Wallis の検定を行ったところ、有意

差は見られなかった ($\chi^2(3, N=34) = 1.20, p=.75$)。

②自分を意識した程度

2(群)×2(条件)の2要因分散分析を行なった。

その結果、群×条件の交互作用が有意であり ($F(1,31)=8.63, p<.01$)、単純主効果の検定を行なったところ、赤面低群において TFA 条件に比べ、SFA 条件の得点が有意に高かった ($F(1,31)= 18.01, p<.01$)。また TFA 条件で赤面低群に比べ、赤面高群の得点が有意に高かった ($F(1,31)= 4.81, p<.05$)。そして SFA 条件で赤面高群に比べ、赤面低群の得点が有意に高い傾向にあった ($F(1,31)=3.83, p<.1$)。しかし、赤面高群では TFA 条件に比べ、SFA 条件で自分への意識が高まっていたという結果は得られなかった。

<状態社会不安>

恐れ/困惑、赤面、恥、自己イメージ/相手が自分に持ったと思うイメージで構成される状態社会不安得点について2(群)×2(条件)の2要因分散分析を行なった(Fig.4)。

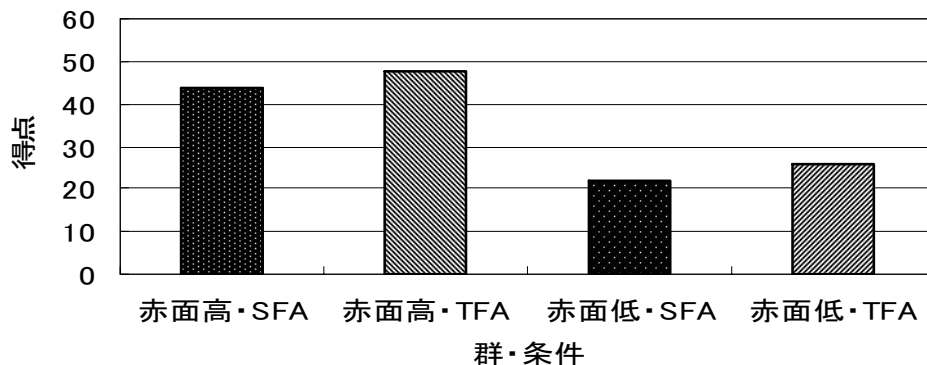


Fig.4 状態社会不安

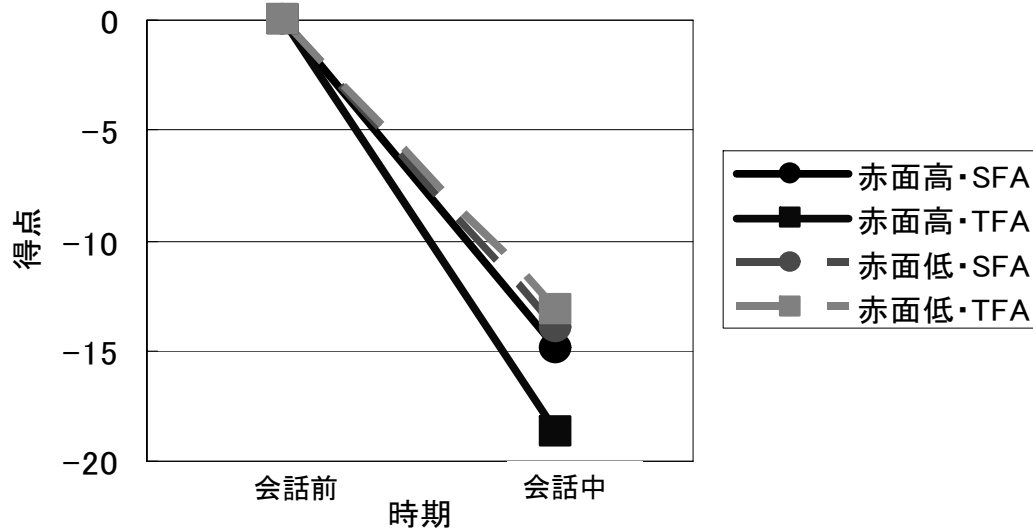


Fig.5 自動思考

その結果、群の主効果が有意であり ($F(1,31)=12.59, p<.01$), 赤面低群に比べ、赤面高群の得点が高かった ($p<.01$). しかし条件において主効果は見られなかった ($F(1,31)=.42, p=.52$). また交互作用は検出されなかった ($F(1,31)=.00, p=.97$).

<自動思考>

SCQ の項目のうち、本研究における対人相互作用場面に当てはまらない質問項目(項目 8「私は物を落としたり、こぼしたりするだろう」および項目 14「私はきちんと書けないだろう」)は除外して分析を行なった。

自動思考の頻度について、2(群)×2(条件)×2(時期)の 3 要因分散分析を行なった。その際、ベースラインを揃えるため、会話前において一元配置の分散分析を行った結果、有意差が見られたため、会話前の値を基準とする変化量を用いた(Fig.5)。

その結果、時期の主効果のみ有意であり ($F(1,31)=71.44, p<.001$), 会話前に比べ、会話中の得点が低かった ($p<.001$). したがって、群、条件に関係なく会話前に比べ、会話中に否定的な自動思考が思い浮かぶ頻度が低減していた。

考察

<操作チェックについて>

まず、時系列的に測定した状態不安に関しては、本実験場面は群に関係なく不安を喚起させる場面であったという事が明らかとなった。しかし、特に赤面高群において会話中の不安が喚起されていたため、実験場面は妥当であったと言える。

次に、会話内容についてどの程度覚えているか回答を求めた結果、赤面高群・TFA 条件では、赤面高群・SFA 条件や赤面低群・SFA 条件に比べ、会話内容をよく覚えていた。また赤面低

群・TFA 条件でも会話内容はよく覚えられていた。したがって、群に関係なく、SFA 条件に比べ、TFA 条件において会話内容を覚えていた事が分かった。しかし、得点に有意差は見られなかったため、TFA 条件に対する実験操作は十分ではなかったと考えられる。

さらに“自分を意識した程度”について、赤面低群では TFA 条件に比べ、SFA 条件で自分への意識が高まっていた。これは SFA 条件で自分に注意を向けるように教示をしたためと考えられ、赤面低群においては操作が妥当であったと考えられる。しかし、赤面高群では TFA 条件に比べ、SFA 条件で自分への意識が高まっていたという結果は得られなかった。したがって、SFA 条件に対する実験操作も十分ではなかったと考えられる。

<状態社会不安について>

群の主効果が見られ、赤面低群に比べ、赤面高群の状態社会不安が高いことは分かったが、赤面高群において、SFA 条件に比べ、TFA 条件の状態社会不安が低いという仮説は支持されなかった。

仮説が支持されなかった原因として、TFA 条件における教示が挙げられる。本研究では TFA 条件に対する実験操作の妥当性はある程度示されたものの、十分とは言えなかった。今回用いた教示は、「5分の会話中に、実験協力者が5分間で話した内容を思い出すように言います。そのため実験協力

者の言う事にしっかりと注意を払うようにして下さい。あなたが実験協力者の言う事に対して注意を集中していれば、質問に答える事は簡単です。」というものだった。しかしこの教示では、後にテストをされるという不安・緊張が喚起されたかもしれない。テストに対する不安(テスト不安)と社会不安は、評価されることを扱っている点で、関係があると考えられており(Leary,1983)、本研究における状態社会不安の得点にも影響した可能性がある。したがって会話中に、「この後何を聞かれるのか」、「会話を覚えなければいけない」という事が気になり、不安が喚起された可能性がある。

このような点から、教示によって赤面高群・TFA 条件においても不安が喚起され、結果的に赤面高群の状態社会不安得点が高くなった可能性が考えられる。一方で、先行研究(Zou et al.,2007)では仮説が支持されているため、TFA 条件に対する教示はよくないと一概に言えない。しかし本研究で得られた結果から今後はテスト不安との関連を見る等して、教示内容を改訂する必要があると考えられる。

<自動思考について>

自動思考について、群、条件に関係なく、会話前に比べ、会話中の得点が低減しており、赤面高群・SFA 条件において、会話前に比べ、会話中の否定的な自動思考が増加するという仮説と、赤面高群・TFA 条件において、会話前に比べ、会話中の否定的な自動思

考が低減するという仮説は支持されなかった。

この原因として、二点考えられる。一点目は実験協力者の要因である。実験終了後の内観報告の際に、「実験協力者の人が話しやすかった」と言う実験参加者が多かった。よって、実験協力者が実験参加者にとって話しやすい相手であったため、会話中に否定的な自動思考が思い浮かびにくかった可能性がある。今回は会話前に「あなたが初対面の人と1対1で話をする時の事を思い浮かべて下さい。」とだけ教示して SCQ に回答を求めており、実験参加者がどのような人物との会話場면을思い浮かべたのかわからない、あるいは不安が喚起される人物像が異なる可能性がある。したがって、会話前に自分が思い描いていた人物よりも話しやすかったということが、否定的な自動思考の思い浮かびにくさにつながったのではないかと考えられる。

二点目は尺度の問題である。本研究で用いた SCQ は本来、「この1週間、それぞれの考えがどれくらい浮かんだか」を尋ねるものであり、本研究における対人相互作用場面で思い浮かんだ思考を測定しきれていない可能性がある。今後は自動思考を測定する尺度についても検討が必要であると思われる。

<まとめ>

本研究では社会不安の維持要因と考えられている SFA が状態社会不安

や否定的な自動思考を増加させ、TFA が状態社会不安や否定的な自動思考の低減に効果があるという明確な結果を得る事ができなかった。

しかし非臨床群において、対人相互作用場面で不安を生じるという今回の結果から、社会生活に支障をきたすほどではなくとも、赤面不安者は普段の生活の中で緊張や不安を感じる機会が多くあるものと考えられる。今後も教示や用いる尺度を再考し、妥当な実験場面を作った上で検討を重ねる必要がある。注意操作によって不安の低減につながるという事が本邦でも実証されれば、臨床群だけでなく、非臨床群においても緊張や不安が緩和する介入法として役に立つと考えられる。

よって本研究では赤面不安についての情報が得られ、赤面不安に対する今後の治療や不安緩和への示唆につながったという点で意義があったと考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association
2002 *Diagnostic and statistical manual of mental Disorders*. 4th ed., text revision. Washington, D. C. : Author.
- Arimitsu, K., Furukawa, T., & Cark, D, M. The Social Cognitions Questionnaire . Unpublished.

- Bögels, S. M., & Lamers, C. T. J. 2002 The causal role of self-awareness in blushing-anxious, socially-anxious and social phobics individuals. *Behaviour Research and Therapy*, **40**, 1367-1384.
- Clark, D. M., & Wells, A. 1995 A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneire (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*. New York: Guilford Press, pp. 69-93.
- 福田一彦・小林茂雄 1983 日本版 SDS 使用の手引き 三京房
- Holt, C. S., Heimberg, R. G., Hope, D. A., & Liebowitz, M. R. 1992 Social domains of social phobia. *Journal of Anxiety Disorders*, **6**, 63-77.
- 金井嘉宏・笹川智子・陳峻雯・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 2004 Social Phobia Scale と Social Interaction Anxiety Scale 日本語版の開発 心身医学, **44**, 841-850.
- 笠原敏彦 2005 対人恐怖と社会不安障害 金剛出版
- 近藤喬一 1980 対人恐怖の時代的変遷—統計的観察— 臨床精神医学, **9**, 45-53.
- Leary, M. R. 1983 *Understanding social anxiety*: Social, personality, and clinical perspectives. Beverly Hills, California: Sage Publications. (リアリィ, M. R. 生和秀敏 (監訳) (1990). 対人不安 北大路書房)
- Liebowitz, Heimberg, Fresco, Travers, & Stein. 2000 Social phobia or social anxiety disorder: What's in a name? *Archives of General Psychiatry*, **57**, 191-192.
- 丸山 晋・児玉和宏・小島 忠・深沢裕紀 1982 対人恐怖の時代変遷 臨床精神医学, **11**, 829-835.
- Mattick, R. P., & Clarke, J. C. 1998 Development and validation of measures of social phobia scrutiny fear and social interaction anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, **36**, 455-470.
- 毛利伊吹 2002 対人不安の心理学的研究：状況要因と認知モデル 東京大学大学院総合文化研究科 博士論文
- Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. 1997 A Cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, **35**, 741-756.
- Stopa, L., & Clark, D. M. 1993 Cognitive process in social phobia. *Behaviour Research*

- and Therapy*, **31**, 255-267.
- Wells, A., Stopa, L., & Clark, D. M. 1993 The Social Cognitions Questionnaire . Unpublished.
- Woody, S. R. 1996 Effects of attention on anxiety Levels and social Performance of individuals with social phobia. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 61-69.
- Zou, J. B. , & Hudson, J. L. , & Rapee, R. M. 2007 The effect of attentional focus on social anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, **45**, 2326-2333.
- 付記：本研究は、2007 年度に徳島大学大学院人間・自然環境研究科(臨床心理学専攻)に提出した修士論文を一部加筆・修正したものである。ご指導いただきました先生方，研究にご協力くださいました学生の皆様に，心から感謝申し上げます。

(受付日2010年9月30日)

(受理日2010年10月12日)